

尊者ガムポパの口訣『最勝道宝鬘』第2章 3偈4偈

2024/10/25 Masako Seino

三、教誨の欠点と利点を知って、上師の教誨を選ぶことを間違わないことが必要である

教誨（きょうかい）：第1義には、教えさとすことをいう。同義語として**教戒**（きょうかい）があるが、こちらは、教え戒めることをいう。両者の違いは「誨（意：知らない者を教えさとす）」と「戒（意：いましめ。さとし）」の違いである。（Wikipediaより）

<ドルズィンリンポチェのご法話（2024/4/20）音声文字起こし>

これは先生を非常に大切である、自分の目のように大切であると考えて、先生を大切にしていなければならないのですが、それは何故かといいますと、私たちはいま仏の境地、仏になることを望んでいるわけです。苦しみから逃れることを望んでいるんですけど、それはラマによって、先生によってそれらの境地を得ることができるわけです。ですので、まずは先生によるまえに、先生が本当に先生としての定義、条件を備えているのかどうかというのを、まずはわれわれの側が考えて分析します。

で、まず自分たちが考えたうえで、この先生はこのラマは本当によい先生だという風にわかって、ラマであると選んだならば、今度は先生がおっしゃった通りに、言われた通りに、実践を行っていく必要があります。

いまこの時代は濁世の時代だという風に言われますので、まったく悪いところがなくて功德ばかりがあるような素晴らしい先生を見つけるのは非常に難しい時代であります。ですが、ラマを見たときに、悪いところもある功德もある、じゃあその悪いところはどこかあるのか、その功德というのはどこかあるのか、ということを考えて、それらをはかって、先生、ラマの功德はどれだけあるのか、この人に頼っていいのかどうか、というのをまずは考える必要があります。

一般にラマと呼ばれる人、善知識と呼ばれる人は、どういう人であるのかというのを分析するための条件というものがあります。密教における**阿闍梨**というのはどういう人であるべきか、大乘の**善知識**と呼ばれる先生はどのような性質を備えていなければいけないのか、**独覚**や**声聞**と呼ばれる先生はどのような条件を持っていなければいけないのか、というのが一般に説かれます。

それは、たとえば、プロフェッサー、博士ですかね、そういう方たちもどのような条件をもっていないとプロフェッサーと呼ばれないのか、というのと同じで、仏教の先生方にもどのような条件を備えていなければならないのか、その定義というものがございます。ですが、

そういう条件のなかで、それをまとめると、まずは慈悲の思いをもって、菩提心を起こしている、そして、いついかなるときであっても善知識である、知識を備えている。それは言葉だけではなくて、本当の意味で菩提心を備えており、一切衆生を見捨てることなく守り育てていく、そういう功德を備えている、そういう先生による必要があります。というよるべき性質というものが入菩提行論に説かれている。(下線は清野が引きました)

阿闍梨：密教では秘法に通じ、伝法灌頂（秘法を伝授する儀式）を受けた者をいう。後に伝法灌頂を受けた僧に宣旨（せんじ）によって与えられる称号。（仏教語大辞典）

善知識：善法、正法を説いて人を仏道に入らせる人。外から護る外護、行動を共にする同行、教え導く教導の三種を教える。また菩薩をさすことがある。（仏教語大辞典）

独覚：三乗のひとつ。仏の教えによらないで自力で悟りを開き、静かに孤独を楽しんで、利他のための説法をしない聖者。（仏教語大辞典）

声聞：縁覚（独覚）と菩薩とともに三乗のひとつ。釈迦の説法の声聞いて悟る弟子。その目的とするものが個人的解脱にすぎないので、大乘の立場からは小乗の徒とされる。（仏教語大辞典）

三乗：「乗」は乗り物の意。また、その実践の方法、あるいは実践する人。衆生を乗せて悟りの世界へ運ぶ三種の教法。声聞乗・縁覚（独覚）乗・菩薩乗または大乘のこと。

入菩提行論：シャーンティデーヴァ（685年～763年）によって700年頃にサンスクリット詩として作られたとされる大乘仏教の典籍である。（Wikipedia）

ガムポパ大師が1079年～1153年の方なので、『入菩薩行論』は、今私たちが読んでいる『最勝道宝鬘』が書かれた時より400年くらい前の書です。（清野つぶやき）

以下、**「入菩薩行論」**について、

「入菩薩行論」ゲシュエ・ソナム・ギャルツェン・ゴンタ／西村香 訳註（チベット仏教普及協会<ポタラカレッジ>）より

「入菩薩行論」目次：

- 第1章 菩提心の利益
- 第2章 罪の懺悔
- 第3章 菩提心の受持
- 第4章 菩提心の不放逸
- 第5章 正知の守護
- 第6章 忍辱波羅蜜
- 第7章 精進波羅蜜
- 第8章 禅定波羅蜜
- 第9章 智慧波羅蜜
- 第10章 廻向

ソナム先生のご解説によれば、

チベットではこの論書はたいへん重要とされており、「チュン・ジュク」と呼ばれて、チベット仏教の四宗派すべてで大切に学ばれています。小乗仏教徒にとっての『ダンマ・パダ（法句経）』、ヒンドゥー教徒にとっての『バガヴァッド・ギーター』、キリスト教徒にとっての『聖書』に例えることができるでしょう。この論書のチベット仏教における役割はそれほど大きいのです。（p10）

どのように心を教化（コントロール）するべきかについて、『入菩薩行論』ではとても論理的に、具体的に、実践的に、わかりやすく書いています。（p11）

リンポチェがご法話で説いておられる

仏教の先生方にもどういう条件を備えていなければならないのか、その定義というものがございませう。ですが、そういう条件のなかで、それをまとめると、まずは慈悲の思いをもって、菩提心を起こしている、そして、いついかなるときであっても善知識である、知識を備えている。それは言葉だけではなくて、本当の意味で菩提心を備えており、一切衆生を見捨てることなく守り育てていく、そういう功德を備えている、そういう先生による必要があります。というよるべき性質というものが入菩薩行論に説かれている。

ということについて、『入菩薩行論』を見てみました。

まずは「本当の意味で菩提心を備えており、一切衆生を見捨てることなく守り育てていく」、ということが、大前提だと思いました。

『入菩薩行論』第1章「菩提心の利益」本文より

9 菩提心をおこした瞬間に、輪廻の囚人として縛られ困却する者たちは仏子と呼ばれ、天（＝神がみ）と人間に礼拝される者となる。

10 優れた錬金術のように、不浄なからだをとらえてそれを勝者の無価の宝と変える。このような菩提心を堅固に持つべきである。

11 衆生を指揮する長は、無漏なる智慧によって深く考え抜かれ、〔菩提心を〕尊いものとされた。有情の住する所（＝輪廻世界）を離れたい者は、宝なる菩提心の心を堅固に持つべきである。

12 他の善はすべて、芭蕉樹のように、実を結んだ後、消えてしまう。菩提心の樹は、常に、実を結んだ後もなくなることなく、増大する。

13 耐えようもない程の罪を犯したとしても、あたかも勇者に頼ることで恐怖から解放されるかのように、それ（＝菩提心）に頼れば一瞬にしてそこから自由になれる。注意深い人はどうしてそれに頼らないであろうか。

14 それは劫末の火のように、大きな罪を一瞬にして焼き尽くす。その功德は無限である。智慧を持つ弥勒は善財童子にそう説かれた。

15 菩提心は要約すれば、二種類となることを知るべきである。願う菩提心（＝発願心）と、菩薩行に入る菩提心（＝発趣心）とである。

16 行きたいと思うことと、実際に行くこと。その区別を知るように、賢者はこの二種の区別を順に知るべきである。

17 発願心によっても、輪廻において大きな結果が生じる。しかし、発趣心によるように、常に福德が生じることはない。

18 [発趣心をおこした] その後は、衆生界を救うために不退転の心で、この心を正しく実践することになる。

19 そしてこれからは、眠り、放逸してしまうとしても、[菩提心の持つ] 功德の力により [福德が] 絶え間なく、虚空のごとくあまねく生じる。

20 それが正しいことを『善臂問経』において、小乗に関心を持つ者たちのために如来は説かれた。

21 「衆生の頭痛を取り除こう」という役立とうという思いを持っているだけでも、無数なる福德を持つことになる、とすれば、

22 一人一人の不幸を多く除きたいという気持ちを持つなら、それぞれにも無限なる功德が成就することは言うまでもない。(下線は清野がひきました)

下線部、菩提心には二種類あること。

「願う菩提心（＝発願心）と、菩薩行に入る菩提心（＝発趣心）とである。

行きたいと思うことと、実際に行くこと。その区別を知るように、賢者はこの二種の区別を順に知るべきである。」と説かれています。

（『解脱の宝飾』では、「発心の菩提心」「発趣の菩提心」と訳されていて、p 173-181 で説かれています。）

ソナム先生のご解説によれば、

（『入菩薩行論』で）シャーンティデーヴァは、心髄として、菩提心の利益と、二つの菩提心をおこす行について学ぶ方法を説いていきます。(p 17)

このように菩提心をおこしたなら、自分自身でそれを称賛し、よろこぶべきだとシャーンティデーヴァは説きます。菩薩となるための修行を始めるという、堅固な誓いをするのです。菩薩行には六波羅蜜を實踐する以外の修行はありません。(p 18)

菩提心は大乗仏教の入門だと言えます。大乗の仏道の支柱、大乗の仏教の生命、大乗の一切の經典の心髄、八万四千の法門の心髄の活力、大乗の仏教の摘要です。三世（過去、現在、未来）の一切の仏、菩薩の聖なる心の奥底におきるもの、すなわち最も大切なものもあります。成仏を速やかにする、聖なる重要なものであり、その有無は大乗仏教と小乗

仏教とを区別する最大のちがいです。菩提心の偉大なる功德を心底納得し、菩提心を修習するには、信仰と尊敬と喜びの心をおこすべきです。(pp35-36)

というように、『入菩薩行論』では、まず菩提心を起こすこと、その上で六波羅蜜の実践をする菩薩行の大切さを説かれています。このことは仏教の先生を選ぶときの条件であると、ドルズィン・リンポチェはおっしゃっているのだと思いました。

四、慎重な智慧と信仰によって、聖者上師のお考えを受け取ることが必要である。

<ドルズィンリンポチェのご法話 (2024/4/20) 音声文字起こし>

これは先生、ラマを得たらそのあとどうすればよいかが説かれています。智慧というのは、世俗のレベルや世俗を離れた智慧などいろいろな智慧があるんですけども、一般にラマ、先生によって、聞思修、勉強するさいに、本当に弟子の側に興味がある、学ぼうとする意欲があるのか、言ったら実践できるのかどうかを見る必要があります。

その弟子になった弟子の側に智慧がある、説いたものを理解する智慧が必要なんですけれども、智慧だけではだめで、そこに信仰心というものが必要になってきます。その信仰心には**三つの信仰**というものがあんですけど、功德が不可思議であるという信仰と、ラマにたよって実践しようとする信仰と、ラマを捨てないという信仰、その三つの信仰をもって行っていく。そのさいに、慎重に行うことが必要です。何度も何度も聞思修、先生の口訣や教えというものを何度も何度も学んで授かる必要があります。

たとえばカギユ派という宗派、リンポチェもそうなんですけど、カギユ派のなかで、ナローパという祖師がおられます。非常に重要な方なんですけど、このナローパという方は、インドの行者だったんですけども、その先生がティローパという方に師事して、非常にたくさん苦行を行われました。非常にたいへんな苦行をティローパから命ぜられて、ナローパは一生懸命その苦行を行って、最後の最後にマハムドラーの教えを授かって、本当のありようというものを理解されました。

ミラレパという方がおられます。これもカギユ派の祖師なんですけど。チベットの行者です。これはこのテキストを書かれたガムボパのお師匠さんにあたるんですけど、そのミラレパという方も非常な苦行というものを行われました。ミラレパという人は、自分の人生のなかで、人を殺す罪を犯します。で、人を殺したことを後悔して、先生を探し求めて、根本のラマであるマルパ翻訳師という人において、マルパの教えを授かって実践したわけですがそれは、簡単には教えは授かれなかったわけです。このミラレパという人は、先生から教えを来る日も来る日も授かることができずに、さまざまな苦行を課せられて、それを努力して一生懸命成就します。

たとえば、マルパから家を建てると言われれば、家を建てますし、この仕事をしろと言わ

ればそれをなす。召使のような仕事をしろと言われれば、それに従ってその行をおこなっていきます。しかし、そのようにたいへんな苦勞をしても法をいつまでも教えてもらうことができませんでした。しかしミラレパはマルパに対して邪見というような思いを起こすことなく、ああ自分が法を授けられないのは、自分が積んできた罪のせいである、悪いことをした結果として、法を授けてもらえないんだと理解して、一生懸命苦勞して苦行を行じたすえに、マルパという先生から、カギユの教えをすべて授かることができました。

マルパ翻訳師の思いに、ああこの弟子はほんとうに信仰心をもっており、努力するだけの意志力を秘めている、そしてこの人に法を授ければ、衆生を利益するだろうと考えて、自分自身が持っていた教えすべてをミラレパに授けました。

マルパという方も、実際に、インドまで法を授かりに行って、チベットに持ち帰った方なんですけど、このマルパ翻訳師にも非常にたくさんの弟子がいます。非常にたくさんの弟子がいます。その弟子にもたくさんの弟子がいるという、非常にたくさんのお弟子さんがいる、その中でも一切の口訣の教えを授けたのは、乞食のような何も持っていなかったミラレパでした。

ミラレパという人は一心に先生を信仰して、そして精進おこして、一生懸命努力して、意志の力をもって行じたために、すべての教えを授かった人です。そして、そのマルパから教わった教えを、修行して、一つの生、一生のうちに、一つの身体で、教誨を實踐して、仏になったと言われます。ですのでカギユ派のなかでも、非常に偉大なラマ、大切な先生であるといわれます。

ミラレパという人の教えを説いた伝記と、十万歌というミラレパの歌った歌があるので、みなさんもぜひ読んでみてください。日本語にも古いものがあるんですけども、それらをぜひ読んでみてください。これらを読むと、ミラレパが受けた非常な苦しみを、ある人は泣きますし、またある人は実践をするにはこれだけの努力をする必要があるんだなと。また輪廻というものには本当がない、真髓がない、という思いを起こすかもしれない。で、またそのお話のなかにはミラレパが空を飛んだりするとかいう神ペン？が数多く書かれていますので、仏の法、仏法というものはすごいものなのだという信仰を起こす人もいるかと思います。

これを読むと、先生に弟子がどのように師事するべきか、よるべきか、というものが説かれていますので、みなさん一読していただければなと思います。

○三つの信仰について

2024/9/5 第一章7偈、8偈 尾関さんの資料より

<ドルズィンリンボチェのご法話音声文字起こし～2 日目質疑 終より引用>

信仰には三つの信仰、三信があるんですけど、それは対象である先生や三宝の功徳を信仰します。心にある菩提心、どのような慈悲を持っておられるのか、心がどうであるのを観察してから信仰を起こします。例えば、この人かっこいいなあ、僧侶の服をまとっている

からかっこいいなあ、とうのではなく、お心にどのような特質かあるのかと、私は他人にはない素晴らしいものを持っておられる、菩提心や慈悲を持っておられるといのを見て、それを信仰の対象とする必要があります。昨日も説きましたが、信仰というのは三つあります。これは、*清浄信（しょうじょうしん）というもの、勝解信（しょうげしん）、現求信（げんぐしん）というもの、「三つの信」があるんですけど、先生の功德が素晴らしいとわかって、それに対して信仰を行う、そして、先生が持つておられる功德が素晴らしいのだというのが分かって、実際にその功德を得たいというふうに考える、また、信仰する際には疑いがあると信仰することはできません。仏教のことだけでなく、普通の世間のことを考えても、例えば学校に行っているときに、この先生たち本当に良い先生なのかなと言うふうに疑いながら勉強すると、勉強もよくいかないわけです。それは、普通の世間でも一緒なんですけど、仏教に対して疑いを持ちながらすると、自分の中に先生の加持が生じることを遮る原因になるので、信仰の対象である根本ラマや先生たちに対して、疑いを持たずに信じる必要があります。

* 「三つの信」について

解脱の宝飾 P93より引用

【信の区別】 では、「信」と言われるそれはどのようなものかということ、信を区別するならば、三つが有るのです。

- 1) 信賴する信と
- 2) 願樂する信と
- 3) 証淨の信です。

ご法話と照らすと 信賴する信＝勝解信、願樂する信＝現求信、証淨の信＝清浄信

○ミラレバの逸話について、

温子先生のご著書「チベットのロックスター 仏教聖者ミラレーバ 魂の声」(風響社) から

ミラレーバを弟子として引き受けはしたものの、マルパはすぐに法を授けなかった。マルパはまず最初に、自分の邪魔をする者たちに対して雹を降らして撃退するようにミラレーバに命じた。ミラレーバは更に悪業を積むことを恐れたが、マルパから法を授かれると信じて、呪術を行った。それを見たマルパはミラレーバのことを、大呪術を意味する「トゥチェン」と名付けた。しかし、師の命令通り雹を降らせ終わったミラレーバが法を授けてくれるように頼むと、

「ハハハ。お前が罪を積み重ねた見返りに、私が不借身命でインドに赴いて、宝に執着せずに金を惜しみなく献上して得た教誨であるダーキニーの温かい吐息をくださいとは、冗談が過ぎて笑いが出る。私以外の者であれば、殺されているやもしれん。さあ、お前は、ヤクドクの人々の作物を償え。高地の者たちを全員治療しろ。それができたら教誨を授けよう。さもなければ、私のもとに帰ってくるな！」

と厳しい言葉を浴びせ、彼を殴りつけた、ここで言われる「ダーキニーの温かい吐息」と

は密教の教えの一つであると推測される。

次にマルパは、教えを受ける条件をして、自分の息子のために城を建てるようにミラレーパに命じた。ミラレーパは今度こそはと師の言葉を信じて、石と土を運び築城作業に従事した。しかし、城が完成しかけると決まってマルパから難癖を付けられて、城を一から建て直すように命じられた。

城を建てることに必死になっていたとき、他の信者たちがマルパのもとへ密教の入門儀式である灌頂を受けにやってくることがあった。その時、マルパの妻ダクメーマの勧めもあって、ミラレーパは他の人々と一緒に灌頂の席に列席しようとした。すると、マルパに見咎められ、灌頂を受けるための代価がなければ灌頂の席についてはならないと厳しく叱られた。ミラレーパはマルパに頬を打たれ、髪を捕まれ放り出されてしまった。そこで、ダクメーマが、ミラレーパが灌頂を受けるための捧げものとして、バターや毛織物を準備した。しかし、マルパは再び、

「それらは、私にどこそこの施主がささげた財産だ。私の財産は、お前の灌頂の謝礼にはならない。お前に謝礼の品があるなら持って来い。さもなければ、私の灌頂の席に座してはならない！」

と言ってミラレーパを蹴りだした。師からそのような無碍に扱われたミラレーパは心くじけて、自殺を考えるまで追い込まれてしまう。そんな意気消沈したミラレーパをダクメーマが慰め、なんとか築城作業を再開させた。必死に土や石を運び、背中が荷ずれでぼろぼろになるろうとも、ミラレーパは働き続けた。途中、逃げ出しかけたこともあったが、なんとか教えを授かりたい一心で、マルパのもとに留まっていた。しかし、どうあっても法が授かれなかったため、ついに師のもとを去る決心をした。そんなミラレーパを哀れに思ったダクメーマは、マルパが面倒をみてやるようにとしたためた偽の手紙とともに、ミラレーパを高弟のもとに送り出した。ダクメーマはマルパの妻であるとともに、マルパの密教修行のパートナーをつとめた人物である。心優しく慈悲心の強かったダクメーマは、ミラレーパの苦しむ姿を見て、耐えることができなかったのだろう。

しかし、マルパからの許可を得ていなかったため、いくら灌頂を授かって瞑想しようともミラレーパの修行に進展は見られなかった。そんなある日、ミラレーパが作っていた城を他の者たちが完成させ、祝いの席に呼ばれた高弟子たちとともに、ミラレーパはマルパのもとへ戻った。そこで初めてミラレーパはマルパがなぜあれほどまでに頑なに自分に教えを授けてくれなかったのか、その理由を聞かされた。

「よく考えれば、我々皆に過ちはない。私はトゥチェンの罪を浄める方法として苦しめただけだ」

マルパはミラレーパの積んだ悪業を見抜いており、その罪を浄化させるために敢えてミラレーパに苦しみを与えたのである。もし、ミラレーパに九回の大きな失望を味わわせれば、彼が大きなる成就を得ることができることがマルパにはわかっていた。しかし、周囲はマルパの本当の意図を理解することが出来なかった。そのためダクメーマはミラレーパ

を他の師のもとに送り出してしまったのである。ダクメーマはミラレーパの業を浄める作業を阻止してしまったが、一方で、ダクメーマという餡がなければ、マルパは鞭の役に徹することが出来なかった。ミラレーパは師の厳しさに絶えきれず、逃げ出してしまっていたであろう。ダクメーマはマルパの真意を理解することが出来なかったが、彼らは二人で一組となってミラレーパの罪の浄化を助けたのである。

マルパのいびりとも取れる厳しい扱いを経て、ミラレーパは前半生で積んで来た悪業を清め、ついに念願の密教の教えを授かることができた。このことはまた、自らの授かった教えの有り難さを真の意味でミラレーパに教えた。それまでの苦労があったからこそ、後の厳しい修行の日々に耐えることが可能になったのである。(pp12-14)

「三つの信」がミラレーパの壮絶な努力を支え、同時に師マルパは本当の意味での菩提心をもって弟子ミラレーパを守り育てていったこと、その尊さを学ばせてもらったと思いました。(清野つぶやき)

のちのミラレーパの厳しい修行の日々についての逸話も、このご本にたくさん書かれています。マルパの師であるナローパ、ナローパの師であるティローパについても書かれています。

マルパは師のナローパから「法を行うために苦行を行わなければ、法を希有なものとして、大切であると考えないため、実践できない」と言われ、たいへんな苦勞をしておられる。ナローパもまた師のティローパから簡単に教えを授かることができずに12年の長い年月をかけて徹底的に苦しめられた。(p19)

○法話集1「修行の道」

ドルズィン・リンボチェによる「五重の道のマハムドラー」前行講座 pp146-149より

信仰と信心がなければ、加持は心に入ってきません。喩えるなら、心は氷のようなものです。氷は温めなければ溶けません。氷を溶かす熱が上師への信心です。これが加持を解き放ち、加持を導き入れます。氷は本来は水ですが、温めなければ水になりません。上師は加持を与えてくださいますが、グルヨーガを行じて信仰と信心を育てない限り、加持を受け取ることができません。それはまた、お茶とコップに喩えることもできます。コップに蓋をしていたら、いくらお茶を注いでもこぼれるばかりで、お茶はコップに入りませんね。コップの蓋をとるのが信仰と信心です。これを育むことで、心が開いて、上師の加持を受け取る器となることができます。

また、あなたが上師を人間としてみるなら、人間は他の人間にそう多くの加持を与える

ことはできません。密教の特徴は、上師を本当の仏と考えるところにあります。あなたが上師を仏と見るなら、仏の加持を得ます。あなたが上師を菩薩と見るなら、菩薩の加持を得ます。上師をどのように見るかによって、あなたの受け取る加持が変わります。

勝義の見解では上師は本当に仏です。上師を、三宝・三根本・仏の三身の体現と考えるべきです。上師の身体はサンガ、上師の言葉は法、上師の心は仏というようにです。上師への浄見を育てなければ、決して加持は心に流れ込みません。まず上師を三宝すべての体現と考え、上師は仏の徳をすべて備えておられると理解すべきです。そう知って信仰と信心を育てます。上師の徳を見れば、自ずと上師への信仰と浄見が生じます。信仰と浄見が生じれば、自ずと加持が心に流れます。

「上師は本当に仏なのだろうか」などと疑うと、加持も疑わしいものになります。たとえ口訣を受けても決定せず、信仰と信心を抱かないのであれば、あまり益はありません。ですから、最初に上師をよく調べてみるのが大切です。上師の資質を調べるのがどれだけ大切かについては、たくさんの解釈があります。上師をよく観察して調べるのです。そうして「ああこの方が私の上師だ、この方に私はついていくのだ」と分かり決心するなら、その上師は本当の仏になります。このように考え、その思いをもって、グルヨーガの祈願を繰り返します。

**持金剛とティローバとナローバ
マルバ、ミラレーバ、ガムボバと
バグモドゥバとジクテンゴン
三恩根本上師のかたがたと
系譜の上師に祈願したまつる
我執が去るよう加持したまえ
慈悲を増すよう加持したまえ
意我を知るよう加持したまえ
仏果を得るよう加持したまえ**

系譜の上師すべての加持が、あなたの根本上師に円満していると考えて、十万回繰り返してください。（下線は清野が引きました）

上師たちが命がけで守り伝えてくださった法に出会ったのは、あらためて奇跡だと思いました。ぼんやりしていないで学習実践に励みたいと思います。